

江戸の ドッグトレーナー

いぬひき
犬牽の伝統に学ぶストレスフリーな愛犬生活

荻島大河

ぼくが**犬の気持ち**になれば、
この本に、きっと「**ありがとう**」って
言うだろうなあ。



愛犬家・**糸井重里**もうなった!

ドッグトレーナー
江戸の伝統を復活させた現代唯一の犬牽による革命の書!!

江戸のドッグトレーナー

犬牽の伝統に学ぶストレスフリーな愛犬生活

荻島大河

星海社

195



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに

私は「犬牽^{いぬひき}」という職業を仕事にしています。

犬牽という言葉をも、今初めて聞いたという方も多いのではないのでしょうか。

それもそのはず。古代から続く日本の伝統的なドッグトレーナーである犬牽は明治時代に絶滅し、長らく忘れられていたからです。

しかし私は近年、一〇〇年以上の時を経て、各種の文献を基にして犬牽の文化を復活させることが叶いました。そういうわけで、私は現代唯一の犬牽をしているというわけです。

この本では犬牽の考え方にに基づき、犬との関係に悩んでいる人に向けた現代のオルタナティブな犬との付き合い方や、その背景にある犬牽の思想や歴史、更には私が犬牽として日々思うことなどを、余すところなくお伝えできればと思っています。

そもそも犬牽とは、江戸時代まで活躍していたドッグトレーナー集団のことです。江戸時代には徳川家や藩に仕えながら「鷹犬^{たかいぬ}」や「芸能犬」のサポートをしていました。

鷹犬も芸能犬も、皆さんにとっては聞き馴染みのない犬たちだと思いますので、軽くご説明しましょう。

鷹犬は、鷹狩で活躍する犬たちのこと。鷹狩ならば、ちょっと聞いたことがあるという人もいるかと思います。「鷹匠^{たかじょう}」と呼ばれる猛禽類専門のトレーナーが大鷹や隼^{はやぶさ}などを訓練して野に放ち、雉^{きじ}や鴨^{かも}や鶉^{うずら}などを狩ってもらう狩猟法です。この鷹狩で獲物を探し出しては隠れ家から追い出し、また時には自ら捕らえることを役割としていたのが鷹犬でした。もう一つの芸能犬とは、徳川家の御宮参りなど祝い行事に登場する犬たちの総称です。犬牽は、そんな鷹犬や芸能犬をサポートする、まさしく現代で言うところのドッグトレーナーとして活動を行っていました。

犬牽の歴史は古く、始まりは仁徳天皇の時代だったとされています。百濟^{くだら}よりやってきた一人のドッグトレーナーと一牙^{さび}（鷹犬の数え方）の鷹犬が、国内にその存在と技術をもたらしたのが発端であると伝えられています。

伝来後の鷹犬は犬牽の前身である「犬飼・狗飼・犬養（全て「イヌカイ」と読みます）」が担当していました。が、詳細な技術については現代には伝えられておらず、藪やぶの中です。

それが鮮明になるのは江戸時代、名称が犬牽になってからのこと。事細かな内容までもが伝書に記されるようになり、逆算して彼らが紡いできた対応方法や犬への姿勢を見通すことが可能となったのです。

中でも明和から天明にかけて活躍した犬牽・水野伝十郎が残した伝書「鷹犬見立仕込たかいぬみ たてし こみのさま様口傳くでん」（以下「鷹犬見立」と略記）は、別格です。まるでドキュメンタリーでも見ているかのような鮮やかさで、私たちに当時の鷹犬と犬牽の姿を見せてくれます。

「鷹犬見立」に目次はありませんが、区分すると以下のような多彩な内容が記されていたことがわかりました。

- 一 迎え入れるべき犬の特徴
- 二 迎え入れるべきではない犬の特徴
- 三 犬の探し方について
- 四 犬の連れ帰り方について

- 五 犬の生活場所について
- 六 迎え入れた犬の対応方法
- 七 犬の食事について
- 八 犬の便について
- 九 食事の作法について
- 一〇 犬の理想的な体格について
- 一一 叱り方について
- 一二 遠牽きの仕方について
- 一三 夏場の生活について
- 一四 水場での対応について
- 一五 犬の洗い方について
- 一六 狩りの仕込みについて
- 一七 鷹狩での作法

この細かい内容。今の書店に並んでいる犬関連の本と、何ら変わりませんね。

と言いつつも、そんな本たちとは違う部分が「鷹犬見立」にはありました。それは犬の権利を尊重する姿勢です。この向き合い方を、私は「鷹犬見立」本文の言葉を借りて「犬の心のままに」と呼んでいます。犬牽はこの姿勢を徹底することで、犬にストレスフリーな生活を届けることを実現していたのです。

それは、犬を迎え入れる段階から發揮されます。そもそも江戸時代は狆ちんなどの例外を除けば、犬の繁殖や売買自体がとても稀な行為です。そのため犬牽は江戸中に生息していた普通の犬、通称「里犬さといぬ」の中から迎え入れる個体を探し出していました。里犬とは読んで字のごとく、自由に里を行き来する犬たちのことを指します。生息地が村に変われば「村犬」と呼ばれ、町になれば「町犬」と呼ばれていましたが、その生活実態はどれも変わりありません。自由に往来を行き来しながらも人々から食べ物や寝床が提供される、現代で言うところの地域猫を犬に置き換えたような存在でした。そんな里犬の中から犬牽は、自ら人間に寄って来る個体のみを迎え入れるようにしていたといえます。決して無理矢理に捕らえて、連れて帰るような手段は取りませんでした。

スタートラインの段階から、人間ではなく犬が主体の関係性が築かれていたのです。迎え入れた後も、その姿勢に変わりはありません。鷹犬や芸能犬は理不尽な叱責さちに晒さ

れることなく野外で好きなだけ活動を行い、ストレスフリーな生活を送ることが叶っていたのです。

犬の権利を尊重し野性の本能を発散させることで、ストレスフリーな生活を犬に提供する。それが犬牽の対応指針であり、心得でした。

その心得の面影は江戸時代以前、彼らが犬飼と呼ばれていた時代でも確認することができます。一例を挙げると、犬飼は川を怖がる鷹犬を無理矢理に引っ張って渡るのではなく、自ら犬を背負って犬が濡れないように川に入るという対応をしていました。犬の意思を尊重する姿勢は、まさに動物愛護の精神を先取りしたものと言えるでしょう。

そんな先進的な心得を備えていた犬牽たちも、江戸時代の終わりと共に歴史の表舞台から消え去っていききました。明治時代に幕府や藩というクライアントを失った鷹狩関係者たちは、軒並み廃業に追い込まれていきます。このまま日本の鷹狩文化も幕を閉じるかと思われましたが、鷹匠は宮内省から古技保存の名目で再雇用されることになりました。一件落着かと思われましたが、犬牽たちは鷹匠とは異なり再雇用の対象にはなりませんでした。こうして犬牽の伝承は途絶え、その存在は彼らの考え方ともども、日本社会から忘れ去ら

れていきました。

しかし、彼らの技術や心得が記された伝書は人知れず現代まで残り続けていきます。その中の一冊、宮内庁書陵部に保管されていた「鷹犬見立」と出あったのが、大学生の頃の私でした。私は「鷹犬見立」に目を通すや否や、現代日本で常識とされる犬との向き合い方とは一八〇度異なる向き合い方をしていた犬牽に、非常な感銘を受けたのです。

「鷹犬見立」の最後には、私の未来を決定する一言が添えられていました。

「この伝承が失われることを恐れて、俗文（日常用語）とかな書きを用いてこれを記した。このように、乞い願わくは、今後この術を行う人が出てくるであろうことを望む」

私は「鷹犬見立」を読み終わった瞬間、彼らが放ったバトンが自分の手のひらに滑り落ちてきたと感じたのです。勝手な話ですが、ずっしりとした重みを、確かに手のひらに感じました。

それからというもの、私はとりつかれたように「鷹犬見立」を筆頭に収集した伝書を基盤とした犬牽復元研究を行っていきました。そして成果を基に再興犬牽流派「やまざら山政流」を

旗揚げし、研究及び広報活動に従事しています。

この本では日々山政流が行っている犬との向き合い方、その主流をお伝えしたいと考えています。

犬と共に暮らしている方には、目の前の犬が犬として生き、そして死んでいけるような生活のアイデアを、犬と共に暮らしていない方には、犬牽の姿を通して人間中心主義とは異なる世界の見え方をお届けできたら幸いです。

目次

はじめに 3

第1章 現代に蘇った江戸のドッグトレーナー・犬牽 15

犬牽との出あい 16

現代を生きる犬牽の役割 20

第2章 犬牽はどのようなトレーニングをしているのか 23

侮るなかれファーストコンタクト——犬との出あい方 24

第3章

犬牽の思想

87

犬にとって最適な空間——縄張りの作り方 35

家に犬を迎え入れる——犬に尽くす姿勢を学ぶ 37

鷹犬の食事とその作法 42

犬を“叱る”とは？ 49

最も重要なトレーニング——遠牽き 55

犬の心のままに——疑似狩猟の極意 69

鷹犬の健康——犬牽から学ぶ犬の最期について 82

第4章

犬牽の歴史

99

鷹犬の発祥

100

第5章

犬牽の日記

127

平安時代
106

鎌倉時代
109

室町時代から戦国時代
111

江戸時代
114

明治時代
123

現代の鷹犬候補
128

種炎を迎え入れた日のこと
132

遠牽きの思い出
138

資料 「鷹犬見立仕込様口傳」について
143

現代語訳版 「鷹犬見立仕込様口傳」 145

翻刻文 「鷹犬見立仕込様口傳」 165

おわりに 188

参考文献 190

第1章

現代に蘇った

江戸の

ドッグトレーナー・犬牽

犬牽との出会い

本題に入る前に、なぜ私が完全に忘れ去られていた犬牽に出あうことできたのか、また現代に蘇らせようと思ったのか、もう少し詳しくお話しましょう。その姿を通して、犬牽式のトレーニングやライフスタイルが現代に必要な理由をお伝えできればと思います。

犬牽になる前の私は、実は鷹匠の弟子でした。諏訪流放鷹術保存会という団体で、鷹匠となるべく「鷹匠捕（鷹匠を補佐する役割）」として修行に励んでいました。

きっかけは和光学園和光高等学校在学時、偶然NHKの番組で師匠の姿を観たことです。大鷹や隼を「据^すえている」つまり猛禽類を拳に乗せている状態の師匠や姉弟子、兄弟子たちの姿を観て、不思議と目が離せなくなるくらい惹^ひかれました。そして番組が終わった瞬間には、無意識に保存会の門を叩いていたのです。

私は生まれる前から犬に囲まれ、幼少期から動物ドキュメンタリーしか観ないという変わった子ども時代を過ごしていたそうです。そのためか、幼稚園児時代の夢はペンギンやシマウマやライオンになるというもの。根っこの部分は今も変わってはいませんが、どこか人間という存在である自分に違和感があったのでしょうか。結局、この時の夢は時間と共

に潰^{つぶ}え、いつの間にか動物園の飼育係やブリーダーに変わっていきました。そんな自分にとって、鷹と共に生きる鷹匠の姿は非常に魅力的な存在に映ったのです。

無事に諏訪流での弟子入りが許されると、私は師匠宅に住み込み弟子として入ることになりました。そこで大鷹と隼、^{はいたか}鶴と共に訓練と鷹狩に向き合う日々が始まります。いつか鷹匠になるべく、奥多摩の山奥で娯楽もなく真摯に向き合った経験は、今も犬に対する姿勢の根本として脈々と生き続けています。

そんな私も大学生になると、実地訓練ばかりでなく学問としての鷹狩にも強い興味を抱くようになりました。そのため和光大学で神話学者である松村一男教授を師と仰ぎながら、鷹狩文化研究を開始しました。国内の鷹匠がどのような歴史や文化や信仰を抱いていたのか、それだけでなく英語圏の鷹匠である falconer が関係する神話・伝説・説話・古典小説・古典戯曲なども研究対象に含みながら、広範囲にわたる猛禽類と人類の関係史を探ってきました。

その最中に、私は犬牽という職業を小耳に挟んだのです。既に伝承は途絶えているが、昔は鷹犬のドッグトレーナーがいたと。鷹匠と関係する全てを知っておきたい、そんな子どもっぽい誘惑に駆られていた当時の私は、早速犬牽の情報収集を開始しました。まさか

その時は、将来生業にするなどとは思っていませんでしたが。

そして「鷹犬見立」と出あったのです。

「鷹犬見立」は寛政七年（一七九五）に完成した、『鷹術秘事口訣伝』（現在宮内庁書陵部蔵一六三／一二三七）という全八冊の鷹狩の伝書における、附録の一冊です（全八冊のうち内三冊附録で附録三巻目は紛失状態）。そのため正式名称は「鷹術秘事口訣傳附録 鷹犬見立仕込様口傳」という大変長い名称になっています。

『鷹術秘事口訣伝』をまとめたのは、当時松江藩で鷹匠として活動していた酒井真十郎周成（？）文政九年（一八二六）でした。酒井はこれまで実践してきた鷹の飼育方法を書き残す一方で、鷹狩関係者にもインタビュを行っていきます。つまり「鷹犬見立」は犬牽本人が書いた伝書ではなく、鷹匠である酒井がインタビュを行い誕生した一冊なのです。

そして酒井が犬牽編のインタビュ相手として選んだ人物こそ、私が師匠と呼ばせていただいている水野伝十郎その人でした。水野は明和元年（一七六四）から天明七年（一七八七）まで、雑司谷御鷹部屋（鷹匠や犬牽などの鷹狩関係者が勤める建物）に所属していた犬牽。ちなみに犬牽は、家系内で技術や文化が継承されるのが基本。そのため水野の兄である金十郎も、同様に犬牽として活躍していました。

水野に酒井がインタビューを行ったのは寛政六年（一七九四）夏のこと。水野は優れた犬牽でしたが、持病のため既に仕事からは退いていました。それでも酒井は翌年まで数十回にわたり、彼の元に話を聞きに訪れます。水野の技術や犬牽としての姿勢に相当惚れ込んでいたのでしょう。その酒井の熱心な姿勢のおかげで、犬の選別方法から普段の接し方について、食事の内容、外歩きの総距離、鷹狩ではどう動くべきか、更には水浴びの仕方など、多岐にわたる鷹犬への伝統的な向き合い方の記録が誕生したのです。

「鷹犬見立」の現代語訳を開始すると、私の目の前に鷹犬と水野が立ち上がってくるような、語りかけてくるような錯覚に囚われるほどにのめり込んでいきました。鷹匠である酒井に対する口伝という構成も、当時の私とオーバーラップする部分があったのかもしれない。しかし、何よりとことん犬の権利を尊重する彼らの姿勢に、自己を消してまるで犬と溶け合うその姿に、とてつもなく大きな衝撃を受けたのです。どうしても人間との間に強制的な関係性が生じる鷹との向き合い方に悩んでいた私にとって、それは一種の啓示もありました。

そして「鷹犬見立」を読み終える時分には、私の進路は鷹匠ではなく犬牽へと変わっていったのです。

現代を生きる犬牽の役割

犬牽がどれほど犬の権利を尊重していたのか、もう少し例を挙げておきましょう。

例えば引綱、リードについてです。犬牽は一部の例外を除き、鷹犬を狩場でノーリードにすることはありませんでした。逆に海外で活躍する鷹犬たちのほとんどは、引綱を付けない状態で鷹狩に参加しています。そちらの方が、確かに狩りの成功率は上がるかもしれませんが。でも、そのためには鷹犬に鷹を襲わないよう訓練を受けてもらう必要があります。獲物は狙うのに鷹は狙ってはいけない、更に言えば獲物も直接噛んではいけないなど、そんなある種人間的な判断を犬にしてもらう必要があるのです。その訓練は国内外問わず、時に厳しい体罰を以て行われます。犬牽にとってそのような訓練は、犬の権利を阻害する行為に他なりません。そのため海外の影響を受けて国内でノーリード式が考案された際も、広まることはなかったのです。犬牽たちは厳しい訓練を排除し鷹犬には野性の本能を活かした活動を行ってもらう、自分たちが引綱を持ち続けることでトラブルは回避する。鷹狩の成果よりも犬の権利を尊重する、それが犬牽でした。

私はそんな犬牽の姿に感銘を受け、こんなに素晴らしい文化が二度と途絶えないよう、現代への適応が不可欠だと考えました。つまり、一般家庭で暮らす犬たちにも応用できる

よう変更が必要だと考えたのです。犬牽たちが代々守ってきた基盤は維持しつつ、今の都市や法律にどうしても合わない箇所に関してはできる限り原形を保ちつつ実行できるように変更を加えました。そうして誕生したのが、現代の犬牽流派である山政流です。

ちなみに「山政」とは、私の実家の屋号です。本来の復元ならば、師匠たちの名称を名乗るべきでしょう。しかし、自分にはまだその実力も器もありません。それでも最大限の責任を表現する形で、自らの屋号を看板とすることにしました。でもいつの日か、偉大な先人たちの名を襲名できたらと想いを馳せています。

話を戻すと、現代の一般的なドッグトレーニングやライフスタイルは、犬が言うことを聞かないから叩いたり、声を上げたり、引綱を強く牽いたり、結局人間のために犬の心を改造する行為と言っても過言ではありません。それは、人間のために犬が持つ犬として生きる権利を曲げさせる行為と同一なのです。

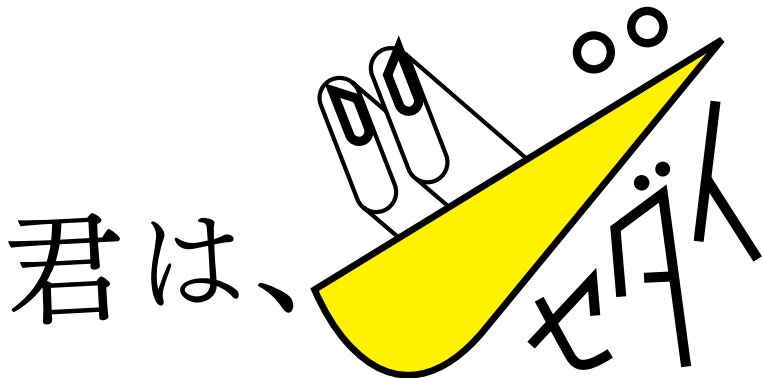
犬の本能を曲げ続けた先に待つの、ストレスによる本能の暴発です。吠え癖や咬み癖が強くなるほか、神経質な性格の悪化や気力低下など心身への影響は計り知れません。

大切なのは、犬を人間になぞらえて扱わず、犬として対応を心掛けることです。擬人化

して考えてはいけません。彼らはどこまでも野性の存在であり、自然と地続きの生き物なのです。江戸時代の狎が鷹犬として鷹狩に参加した歴史が示すように、どんなに小さな愛玩犬と言われる犬たちも根本は獲物を殺して、自然界を生き抜くための力が備わっています。それを忘れて、犬は私たちと同じだ、同じように生きたいはずだ、そう擬人化した対応を行うことで軋轢が、ストレスが生まれるのです。ですから私たちは、犬の意思を尊重する姿勢を崩してはいけませんのです。

その姿勢は同時に私たち人間を助けることにも繋がります。犬という自然と繋がった存在と共に暮らすことで、犬の野性の息吹が引綱を通じてあなたに伝わってくることでしょ。それは、本来人間も備えていたはずの本能を思い出させてくれます。そして同時に自己の心をコントロールするという、現代人に欠落している要素を、犬はたつぷりと与えてくれるのです。

ではいよいよ、皆さんと共に暮らす犬たちの生活がより良くなるヒントになるよう、「鷹犬見立仕込様口傳」を読んで犬牽の生き方を見ていきましょう。



何と闘うか？
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!